

# 複合名詞アクセントの知識と聞き取りの習得 ——中国北方方言を母語とする日本語学習者への追跡調査——

柳 悦

## 1. はじめに

外国人学習者にとって、日本語のアクセントを正しく習得することはコミュニケーション能力を高める意味で重要であろう。しかし、日本国外で日本語を学ぶ学習者にとって、アクセント、イントネーションなど音声面の習得は大きな困難を伴う。それは、学習素材が限られているだけではなく、日本語母語話者の教師が少ないなど、さまざまな面で、生の日本語アクセントに接する機会が少ないからだと思われる。では、このような学習環境において、学習者はアクセントをどこまで正しく習得できるのだろうか、またどのようなアクセントパターンが習得しやすく、どのようなパターンが習得しにくいのであろうか。さらに、学習過程において、どのような傾向が見られるのであろうか。

これまでの研究を見ると、研究対象は主に日本在住の学習者で、手法としてはアクセントなどの聞き取りに関するものがほとんどであり、また刺激語は短い単語が主であった(鮎澤(1995)、磯村(1996)など)。そこで、本研究では、中国在住の日本語学習者を対象に追跡調査を行い、特に外国人学習者にとって習得しにくいと思われる長音節の複合名詞に注目し、アクセント習得の実状とその過程について報告する。また複合名詞アクセントの知識が、聞き取りにどのような影響を及ぼすかという点についても論じていく。

## 2. 方法

本調査の被験者は中国山東省済南市(北方方言話者)に位置する高等教育機関の日本語専攻の学生41名で、滞日経験はない。第一回調査時点では第一学年に属し<sup>1)</sup>初級後半のレベルに達している。詳細は下記の通り。

被験者人数： 41名(うち男性10名)  
年 齢： 19.1歳  
母 方 言： 山東方言(北方方言の下位方言)  
日本語学習暦： 7.8ヶ月

調査に用いた単語は、被験者の教科書『新版 中日交流標準日本語 初級（上下）』に登場する複合名詞で、知識調査と聞き取り調査では同じ単語を用いた。調査時間が学習者に負担にならないよう<sup>2)</sup>、毎回の調査用単語は 22 語となっている。このうち毎回登場する単語は 16 語、交替する単語は 6 語となっている。単語の選出基準は下記 2 点である。

1. 学習者が使用する教科書『新版 中日交流標準日本語 初級（上下）』に登場した単語であること（既習度重視）。
2. 基準 1 を満たした上で、名詞複合語のアクセント型をできるだけ包括すること。

また単語を選定する前に、学習者に対して、調査用単語の熟知度のアンケートを実施した。各単語について、「よく使う」は「4」、「ときどき使う」は「3」、「あまり使わない」は「2」、「使わない」は「1」と評定してもらった。

聞き取り調査の刺激語の読み上げは日本語教育関係者でアナウンス訓練経験のある 50 代の男性 1 名によって録音された。録音方法はパーソナルコンピューターの外部マイク入力端子から Sound It! 4.5 (Internet 社) を用いて録音した。サンプリングレートは 44.1kHz、16bit、モノラルである。音声編集ソフトは Cool Edit 96 を使用し、1 回目と 2 回目の間には 1 秒のポーズを入れ、各刺激語間には 4 秒のポーズを入れた。また本実験の刺激語の前には、練習用単語が 5 語収められている。これらをデータ CD-R に保存した。

調査手順として、初めに、単語リストについて音を聞かず内省でアクセント型を答えさせるテストを行った。その後 CD の音を聞いてアクセント型を判断する聞き取りテストを実施した。記入方法については、ピッチの下がり目に「一」をつけ、ピッチの下がり目がない場合は、「0」と記すように求めた<sup>3)</sup>。半年の間に同じ調査を三回実施した。これらの結果については、正答率の他、回答の正誤のパターンをテスト別・調査回内・調査回間で比較分析した。

### 3. 結果

#### 3.1 全体像

まず両テストの調査回間の正答率は Fisher の直接法検定では 5% 水準で有意差が見られなかったが、調査回内の両テストに関しては第二回にだけ 5% の水準で有意差が見られた。ここで第一回から第三回の知識調査と聞き取り調査実施後の正答率の変化

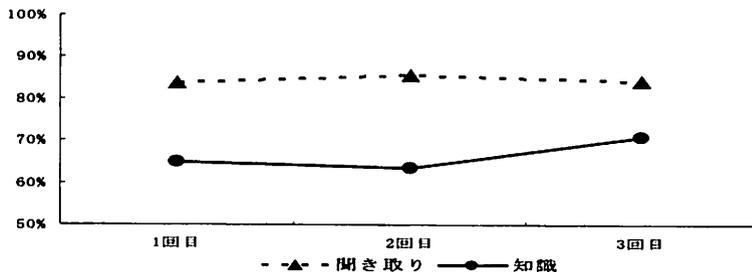


図1 第一回から第三回 知識調査と聞き取り調査の平均正答率

を図1に示す。知識調査に関して三回目の正答率が前の二回より上昇し、変化がもっとも大きいことが分かる。一方、聞き取り調査では、三回ともに84%前後で、半年間での変化はあまり見られなかった。最初から聞き取りテストの正答率が高かったのは、今回の被験者が所属する大学が中国の重点校で、山東省のトップレベルの学校であって、学習者の学習動機が高く、外国語を学ぶ際聞き取りの練習を日ごろから心がけていたために、高い弁別能力が養われたのではないかと推察できる。また一回目と二回目の調査の間に2ヶ月の夏休みがあり、系統的な日本語学習の機会が少なかったために、知識調査も聞き取り調査も二回とも大きな変化が現れなかったのではないかと思われる。しかし、新学期が始まり、学習が再開されると、三回目の知識調査では著しい変化をもたらされた。この段階の学習者は、知覚力はすでにある程度固定化されているのに対して、内省によるアクセントの知識の習得はまだ上昇していることが分かる。

次に、単語への熟知度との相関を見てみる。三回の各調査において、学習者の正答率と単語の熟知度との相関関係を表1に示した。ここから、知識調査の結果は熟知度とやや強い相関がある<sup>4)</sup>のに対して、聞き取り調査の結果は熟知度と相関が小さく、三回目になると相関がほとんどないことが分かる。つまり、学習者が聞き取り調査を受ける際、単語の理解より音の弁別が第一の手がかりとなっており、図1でも述べたように、その正確さはある程度一貫していることが分かる。

表1 各回の調査において正解率と単語の熟知度との相関係数

	一回目	二回目	三回目
聞き取り	0.38	0.28	0.03
知識	0.54	0.45	0.48

表2 第一回から第三回調査結果 (%)

単語	熟知度	調査項目	第一回	第二回	第三回
<b>種類Ⅰ：後部要素は中高型で、複合語アクセントもそれに従う単語</b>					
アイスクリーム	3.46	知覚 聞き取り	82.93 85.37	82.93 85.37	90.24 80.49
紙飛行機	2.17	知覚 聞き取り	95.12 92.68	87.80 95.12	87.80 87.80
<b>種類Ⅱ：後部要素は平板型・頭高型・尾高型で、アクセント核は後部Ⅰ拍目の単語と後部要素は中高型だが、アクセント核も後部Ⅰ拍目の単語の単語</b>					
エアメール	2.44	知覚 聞き取り	95.12 95.12	97.56 100.00	97.56 95.12
サッカーボール	2.90	知覚 聞き取り	92.68 75.61	95.12 87.80	95.12 87.80
テレビゲーム	3.05	知覚 聞き取り	97.56 100.00	97.56 100.00	95.12 95.12
ノートパソコン	3.54	知覚 聞き取り	53.66 85.37	60.98 87.80	68.29 87.80
マラソン大会	2.54	知覚 聞き取り	75.61 92.68	73.17 95.12	80.49 90.24
休憩時間	3.56	知覚 聞き取り	73.17 90.24	46.34 97.56	63.41 80.49
休日出勤	2.12	知覚 聞き取り	21.95 85.37	41.46 92.68	48.78 85.37
携帯電話	3.95	知覚 聞き取り	92.68 90.24	90.24 100.00	92.68 97.56
交通事故	3.73	知覚 聞き取り	87.80 92.68	95.12 92.68	90.24 95.12
就職活動	2.93	知覚 聞き取り	63.41 87.80	63.41 87.80	73.17 75.61
色鉛筆	2.43	知覚 聞き取り	24.39 92.68	21.95 97.56	58.54 97.56
電話番号	3.95	知覚 聞き取り	92.68 97.56	92.68 100.00	97.56 92.68
部品工場	2.73	知覚 聞き取り	80.49 95.12	78.05 100.00	78.05 92.68
北アメリカ	2.32	知覚 聞き取り	7.32 46.34	12.20 56.10	31.71 63.41
キロメートル	3.54	知覚 聞き取り	92.68 100.00		
映画鑑賞	2.05	知覚 聞き取り	87.80 100.00		
海外旅行	3.46	知覚 聞き取り		39.02 78.05	
東京大学	3.71	知覚 聞き取り		92.68 97.56	
往復はがき	1.45	知覚 聞き取り			63.41 90.24
晩ご飯	3.95	知覚 聞き取り			56.10 63.41
<b>種類Ⅲ：複合語アクセントは前部要素の最後になる</b>					
イタリア人	2.54	知覚 聞き取り	9.76 19.51		
ベトナム人	1.78	知覚 聞き取り	7.32 21.95		
ブラジル人	2.34	知覚 聞き取り		9.76 24.39	
ロシア人	2.82	知覚 聞き取り		14.63 24.39	
オーストリア人	2.07	知覚 聞き取り			26.83 60.98
ドイツ人	2.66	知覚 聞き取り			29.27 53.66
<b>種類Ⅳ：複合語アクセントは平板型である</b>					
外国語	3.93	知覚 聞き取り	85.37 95.12		
中国語	4.00	知覚 聞き取り		80.49 92.68	
フランス語	3.41	知覚 聞き取り			90.24 85.37
撮影禁止	2.39	知覚 聞き取り	7.32 100.00		
駐車禁止	2.68	知覚 聞き取り		19.51 97.56	
左折禁止	1.59	知覚 聞き取り			43.90 95.12

(\*P<0.05、\*\*P<0.01)

図 1 から、三回ともに知識調査が聞き取り調査より正答率が低いことが分かるが、果たして、すべての単語がこのような結果なのだろうか。表 2 に詳細を示した。ここでは、単語選出の基準によりそれらを 4 種類に分けて示している。また参考として、学習者の各単語に対する熟知度の平均評定値も示した。

表 2 では知識調査と聞き取り調査の正答率の差が約 30%ある単語を網掛けで示した。また「\*\*」は 1%、「\*」は 5%の水準で各回の知識調査と聞き取り調査の間に有意差が見られたものである (Fisher の直接法検定による)。ここからも、主に第二回から第三回への変化が大きいことが分かる。また網掛けの単語は全体の三分の一を占めていることも分かる。さらに「サッカーボール」(太字、斜体で表示) は、唯一三回とも知識調査が聞き取り調査より正答率が高い単語である。そのほか、「〇〇禁止」という単語に対して、知識調査では非常に低い正答率だったが、聞き取り調査ではほぼ全員正答で、両者の間には大きな差が現れている。また知識調査では「〇〇禁止」と同じような低い正答率の単語は「〇〇人」にも多く見られた。

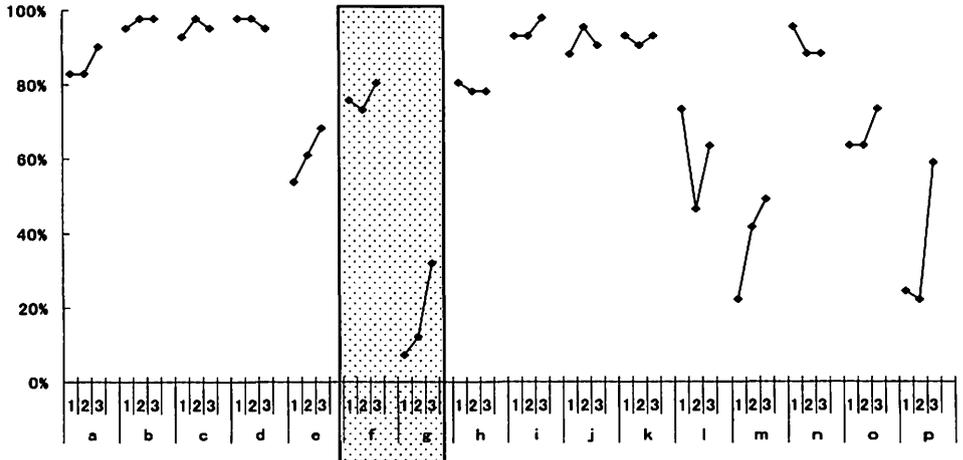
#### 知識調査の変化について

3.1 で三回の調査の全体に関して見ると、知識調査の変化が大きい。では、具体的にどのような単語について、どのような変化があったのか、ここでさらに考察を行う。

今回の被験者は中国人であることから、単語の漢字表記が被験者に影響があるかどうか念頭におき結果を見てみる。ここで、毎回登場する単語をレギュラーグループとし(略称「R 群」)、交代する単語をチェンジグループとする(略称「C 群」)。

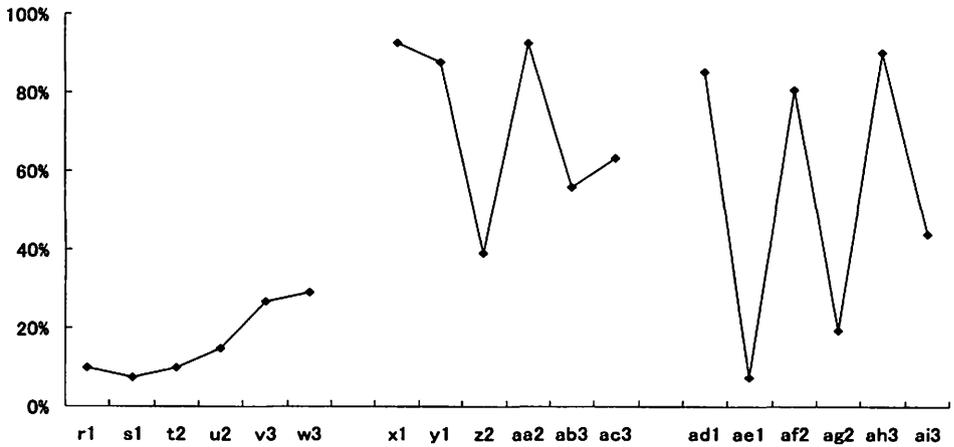
図 2 の R 群の f, g は漢字とカタカナの混合表記だが、それより前の語は純カタカナ表記で、後続する語は純漢字表記となっている。純カタカナ表記、つまり外来語の場合は「ノートパソコン」以外、最初から高い正答率で習得され、また三回の変化も大きくない。しかし純漢字表記の単語に関しては、正答率が全体的に低く、第一回から第三回までの変化も激しい。さらに、「マラソン大会」、「北アメリカ」のような混合表記の単語になると、正答率が高いときもあれば、非常に低いときもある。

続いて、図 3 の C 群について見てみる。この群では、純カタカナ語は x1 の「キロメートル」だけで、それは R 群と同様、正答率が高いことが分かる。そのほか、カタカナ表記があるのは「〇〇人」というパターンの単語だが、これらの正答率を見ると、第一回から第三回へ徐々に上がってはいるが、最後になっても、30%を超えることはなかった。残りは、主に漢字語だが、正答率が不安定で、基本的に熟知度の高い語の場合、正答率も高いという傾向が見られる。(熟知度は表 2 を参照)



a : アイスクリーム	b : エアメール	c : サッカーボール	d : テレビゲーム
e : ノートパソコン	f : マラソン大会	g : 北アメリカ	h : 部品工場
i : 電話番号	j : 交通事故	k : 携帯電話	l : 休憩時間
m : 休日出勤	n : 紙飛行機	o : 就職活動	p : 色鉛筆

図2 R群の詳細（「1,2,3」は調査回を表す）



r1 : イタリア人	s1 : ベトナム人	t2 : ブラジル人	u2 : ロシア人	v3 : オーストリア人
w3 : ドイツ人	x1 : キロメートル	y1 : 映画鑑賞	z2 : 海外旅行	aa2 : 東京大学
ab3 : 晩ご飯	ac3 : 往復はがき	ad1 : 外国語	ae1 : 撮影禁止	af2 : 中国語
ag2 : 駐車禁止	ah3 : フランス語	ai3 : 左折禁止		

図3 C群の調査（「1,2,3」は調査回を表す）

### 知識調査の回答パターン

3.2 では知識調査の個々の単語の正答率の変化を見たが、そこから、学習者にとって、習得しにくいもの、あるいは、習得が不安定なものは漢字語が大半占めていることが分かった。それでは、学習者の回答パターンから、漢字語が学習者にどのような影響があるかを見てみる。

図4から図6は三回の調査において、各単語の回答パターンを示した。正答の部分は  で、誤答率が10%を超える場合は  で示している。 中の数字は、学習者が何拍目にピッチの下がり目があると認識したかというその拍数を表している（例：「5」は5拍目がピッチの下がり目であると回答し、「0」はピッチの下がり目がないと回答した）。そのほか  は誤答率が10%以下のパターンで、中には数種類もあるものもある。図の上段はC群で、下段はR群となっている（3.2を参照）。

まず図4の第一回の調査では、R群において、誤答パターンに「0」が多く、「色鉛筆」、「休日出勤」、「北アメリカ」では、学習者の大半はそうのように答えた。しかしC群では「0」という回答は少なく、「ベトナム人」と「イタリア人」では後部要素「じん」の1拍目にピッチがあると答える者が多く、この二語について前部要素3拍目にピッチがあると答える者も少なくない。さらに、「撮影禁止」という単語に関しては、大多数の学習者が後部要素「きんし」の1拍目にピッチがあると認識している。

続いて、第二回を見てみる（図5参照）。ここでは、図4と同様、R群の誤答パターン中で最も多いのが「0」で、C群も第一回より「0」が増えていることが分かる。またC群の「ロシア人」、「ブラジル人」に関しては、第二回も前回と同じ後部要素「じん」の1拍目がピッチの下がり目だと思っている者が多い。そのほか、前にくる単語が変わっても、「〇〇禁止」は後部要素「きんし」の1拍目にピッチの下がり目があると思っている者の割合は前回とほとんど変わらない。

最後に、第三回の図6を見てみる。図6を概観すると、R群では前二回の調査のような誤答の「0」が一つ単語の大半を占めているものがなくなり、特に「色鉛筆」に関して、「0」と答えたのは前回の半数になった。しかし、C群に関しては、「0」という誤答がまだ存在している。また「ドイツ人」、「オーストリア人」は前二回の調査と同じ系列の単語で、依然として、後部要素「じん」の1拍目にピッチがあると思っている者が多い。さらに、「左折禁止」の回答パターンも前二回の調査と変わりが無い。

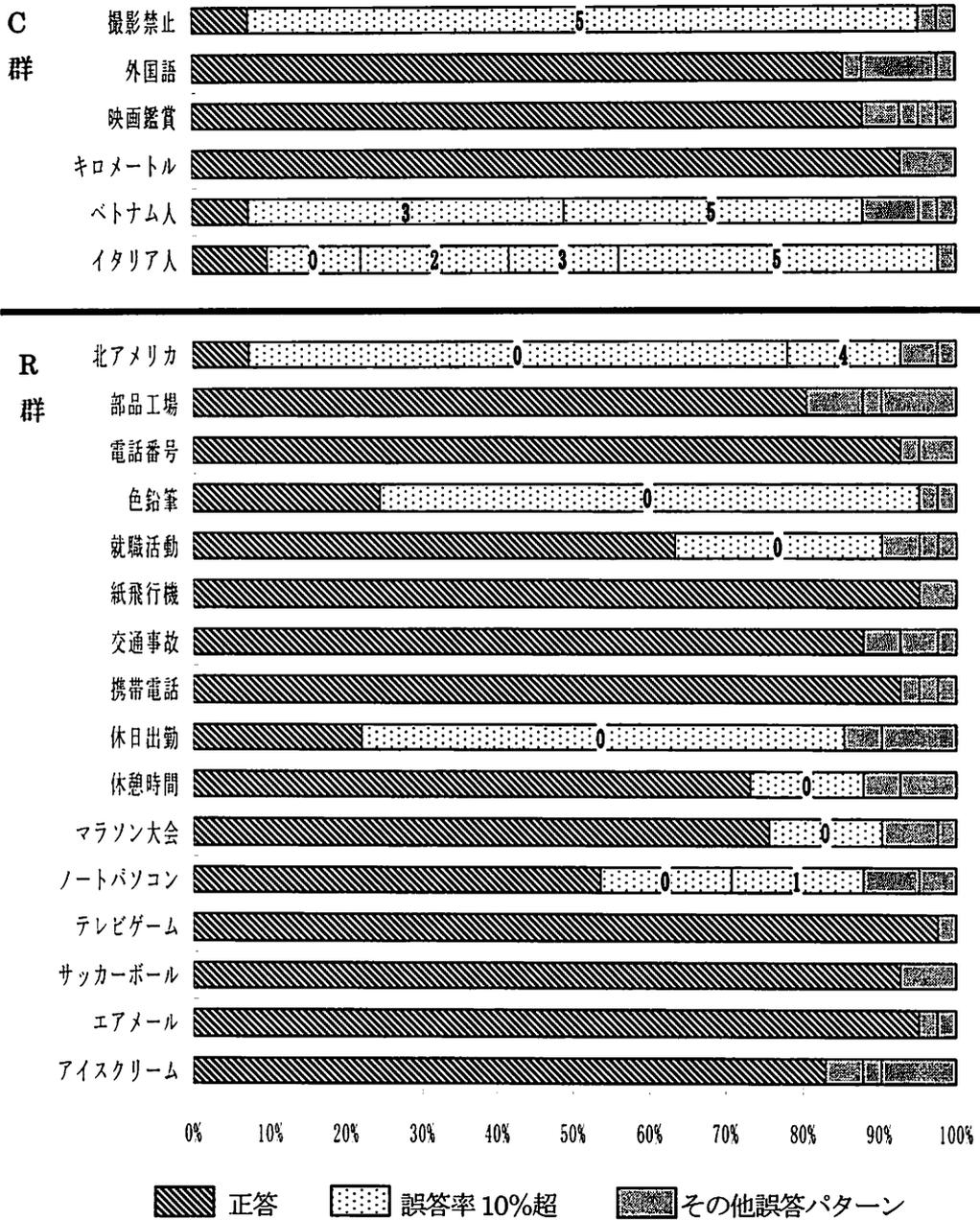


図4 第一回知識調査各単語の回答パターン

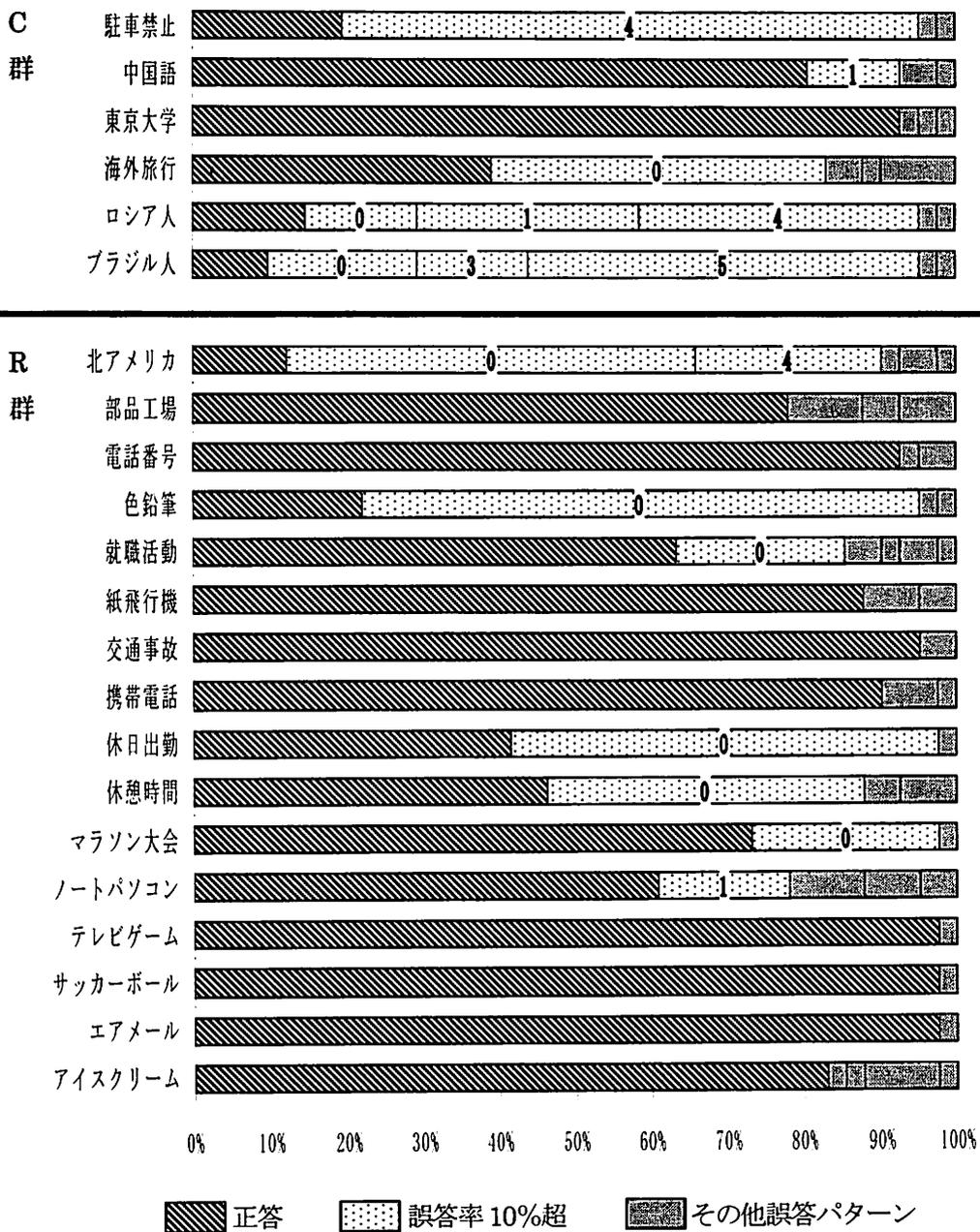


図5 第二回知識調査各単語の回答パターン

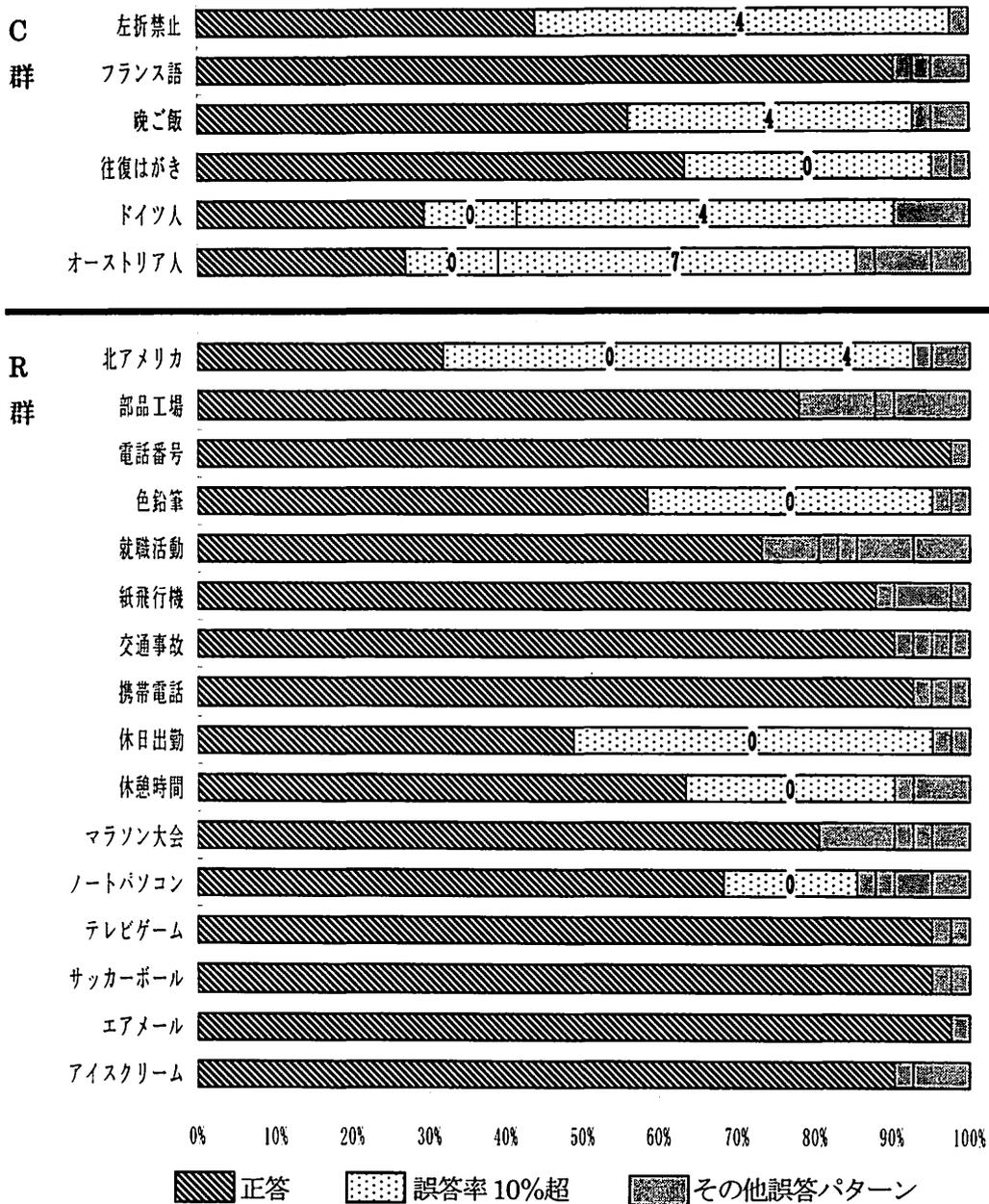


図6 第三回知識調査各単語の回答パターン

#### 4. 考察

3 では、調査全体、及び、特に知識調査の結果について報告した。今回は 3.1 で示したように、聞き取り調査は三回とも大きな変化はなかったため、ここで細かい分析

を行わず、3.1 で示した図表に合わせて考察したい。

まず、聞き取り調査に関しては、三回とも正答率が高く、半年間の変化はあまり見られなかった。3.1 でも述べたように、これは今回の被験者は調査に対する動機が高く、熱心に取り組んだほか、学習能力全般が高いためではないかと思われる。さらに、知識調査では第一回から第三回にかけて正答率が伸びており、特に毎回登場する単語のほうが伸びていることや、「〇〇人」、「〇〇禁止」のような同じパターンの単語も正答率が高くなってきたことなどから、前回の聞き取り調査で聞いた正しいアクセントが学習者に習得され、記憶され、また活用されていることが推察できる。しかし、その反面、アクセントの知識は聞き取りの判断にあまり影響に与えていないと言えるのではないだろうか。

次に、カタカナ語より漢字語のほうが習得が不安定なのは、学習者は漢字圏の出身で、母語干渉が大きいためではないかと思われる。例えば「〇〇禁止」の場合、「禁」の中国語は第四声<sup>5)</sup>で、「止」は第三声で、学習者が高から低へ声調を変化することがすでに習慣になっていて、従って日本語のアクセントの習得に影響を及ぼしたと考えられる。そのほか、「0」と誤答した単語の漢字音を見ると、多くの場合は後部要素の漢字音（特に一字目）に声調の降下がないため、学習者がピッチの下がり目がない「0」と答えてしまったのではないだろうか。しかし、今回その傾向に当てはまらない単語もいくつかあったので、学習者にとって、習得のメカニズムがどのようなものは、今後もっと調査していく必要がある。それに対して、カタカナ語の正答率が高かったのは学習者にとって、漢字の声調による習得の支障がなく、一定の水準に保たれているのではないかと思われる。

## 5. 今後の課題

本論文は中国にいる日本語学習者を対象に、計画した1年間の追跡調査のうち、すでに実施された半年間の調査のデータによって作成されたものである。調査は本論文で使った知識調査と聞き取り調査のほか、発音調査も行ったが、分析の進展が異なるため、発音調査の結果は本論文で言及しなかった。従って、今回の分析結果は、学習者の知識面と聴取面の習得実態を反映しただけで、中国人日本語学習者の複合名詞アクセントについて学習の全体像を見るには、今後、発音調査の結果を入れた結果報告していかなければならない。また分析においても、紙幅の関係で、今回は学習者の母方言の音声特徴との関連づけや、日本語と中国語の音声の強弱との関係などを報告することができなかったが、今後、それらをまとめた上、論じたいと思う。

謝辞：本研究は一年間を計画した追跡調査で、長い時間にわたって調査にご協力いただいた山東大学外国語学院日本語語科 2006 級の学生に厚く御礼申し上げます。また調査の実施にあたり、日本語語科の刑永鳳先生、陳紅先生に感謝申し上げます。

注：

- 1) 中国の新学年は毎年 9 月から始まり、本調査期間は 2007 年 6 月～2007 年 12 月の半年間にわたったため、被験者は第一回の調査時には 1 年生だったが、第二回の調査から 2 年生になっている。
- 2) 実際には、知識に関する調査と聞き取り調査の間に、同じ内容の発話調査も実施した。従って、毎回の調査にはおよそ 1 時間要した。なお、本論文では、知識に関する調査と聞き取り調査のデータのみについて分析を行う。
- 3) 日本語アクセントの知識について、学習者は入門段階ではすでに学習していたが、第一回の調査を実施する前に、筆者が指導して学習者にアクセントの法則を復習させた。その内容は①1 拍目と 2 拍目は違うピッチでなければならない。②単語の中で一度下がったピッチは二度と上がらない。また、特殊拍にはピッチの下がり目を書かないなど、さらにピッチの書き方についても復習した。
- 4) 相関関係の強さの目安としては、通常 $\pm 0.0 \sim 0.2$  ならば無相関、 $\pm 0.2 \sim 0.4$  ならばやや弱い相関、 $\pm 0.4 \sim 0.6$  ならばやや強い相関、 $\pm 0.6 \sim 0.8$  ならばかなり強い相関、 $\pm 0.8 \sim 1.0$  ならば非常に強い相関があるとした。
- 5) 一般的に中国語の声調の具体的な音声特徴を高から低へ 5 段階で表される。一番低いものを 1、一番高いものを 5 とすると、1 音節内の高低変化は第一声 55、第二声 35 で、第三声 214 で、第四声 51 とされている。

#### 参考文献

- 鮎沢孝子 (1995a) 「日本語学習者による東京語アクセントの聞き取り——韓国語・英語・フランス語・北京語話者の場合——」『平成 7 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- (1999) 「中間言語研究——日本語学習者の音声」『音声研究』第 3 巻第 3 号 4-12 頁
- 鮎沢孝子、西沼行博、楊立明、小高京子 (1996) 「北京語母語話者は東京語アクセントをどう聞くか」『平成 8 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会

- 磯村一弘 (1996) 「アクセント型の知識と聞き取り——北京語を母語とする日本語教師における東京都アクセントの場合——」『第 10 回日本音声学会全国大会予稿集』  
日本音声学会
- 窪園晴夫 (1999) 『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版
- 杉藤美代子 (1982) 『日本語アクセントの研究』三省堂
- 西郡仁朗、八山京子 (1996) 「北京語母語話者による東京語アクセントの聞き取りの習得」新プロ「日本語」ESOP チーム 平成 7 年度第 2 回研究会資料
- 柳悦 (2006) 『中国北方方言・上海方言を母語とする日本語学習者のアクセント習得の実態及び母語干渉の原因』東京都立大学修士論文 (未公刊)
- (2006) 「中国人日本語学習者の単純語と複合語アクセント習得——北方方言・上海方言話者による内省と発話の差」、『日本語研究』26 号, 東京都立大学・首都大学東京 日本語研究会
- (2007) 「中国人日本語学習者の名詞複合語アクセントの発音パターン——北方方言・上海方言を母語とする学習者の比較——」、『日本語研究』27 号, 東京都立大学・首都大学東京 日本語研究会
- NHK 編 (昭和 60) 『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』日本放送出版協会  
(中国) 人民教育出版社、(日本) 光村図書出版株式会社合作編写 (2005) 『新版 中日交流標準日本語 初級 (上下)』(中国) 人民教育出版社

(りゅう ゆえ・首都大学東京大学院生)